

LINKtopos 誕生経緯とこれからの期待

—公立大学学生ネットワーク企画・運営のための資料—

公立大学協会

Summary

公立大学では、全国の学生が LINKtopos（リンクトポス）と呼ばれるネットワークを作って、毎年“学生大会”を行ってきました。その大会を公立大学の学長会議と同じ日程・会場で行うことで、全国の学長との交流や議論が実現されてきました。このネットワークは、2011年に起こった東日本大震災の復興活動にボランティアとして参加した学生達が自主的に集まったことを契機として生まれたものですが、公立大学でなければ実現できないような特徴ある活動となっています。

この資料は、LINKtopos をこれからも継続して発展させていくために企画・運営を担う学生達の参考にすることを願って、その誕生経緯や理念、学生大会のプログラムなどをまとめたものです。特に、LINKtopos が大切にしてきた“つながり”の形や、“気づき”を生み出すワークショップのプログラムなどについては、巻末に「参考資料」として示しています。

1. はじめに

公立大学には、学生達が自主的に連携・運営している LINKtopos と呼ばれるネットワーク組織があります。これは2012年に組織され、毎年全国から100名近くの学生が集まる、いわゆる“学生大会”を開催してきたものです。その大会の一部は、全国の公立大学長が集まる年次大会と会場・日程などを合わせて行い、学長会議のプログラムの中に学生達と学長が同じテーマで議論する、“合同セッション”が行われてきました。

公立大学協会では、このような学生大会が持っている大きなポテンシャルを重視して、公立大学にふさわしい活動のひとつにしたいとの願いから、学生達の活動を支援するワーキンググループを委員会活動の中に作ってきました。学生達が大学を超えて連携する形は、学生だけでなく公立大学にとっての財産と考えてのことでした。

ここでは、このネットワークが組織された経緯や理念、継承されてきた働きや、その中で生まれてきたプログラムなどを紹介して、“つながる”ことや、参加する学生が体験する“気づき”を概観して、これからの活動の参考にしたいと思います。

2. 学生ネットワーク

このネットワークは、学生達の希望で必然的・発展的に生まれたのですが、前述したようにそのきっかけは東日本大震災の復興支援活動でしたから、当初の関心や課題は、地域防災に取り組む学生達の自主的なボランティア活動でした。その後、この活動を継続するための話し合いの中で守備範囲を広げ、公立大学協会が支援する事業のひとつに拡大してきました。

2.1 学生組織の発足まで

日本では、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災を契機にして、様々な自然災害で大学生などのボランティア活動が盛んになってきたと言われ、多くのNPO組織なども作られてきました。2011年3月11日に起こった東日本大震災の際にも、全国から多数のボランティアが集まりました。公立大学からも学生ボランティアが、被災地の復興支援活動に向かう機運が高まりましたが、あまりにも大きな災害であったことも原因で、支援活動には混乱もあり、学生ボランティアの安全確保なども大きな課題となっていたので、公立大学協会では、学生ボランティアの派遣も含めた被災地支援のあり方を探るために、2011年6月8日、岩手県立大学を会場にして緊急の学長会議を開催し、「東日本大震災復学生

ボランティア等に関する作業部会」を発足させ、被災地への学生ボランティア派遣の可能性や方法などを具体的に検討しました。そして、岩手県内の復興支援プロジェクト団体である「いわて GINGA-NET」のプログラムに、公立大学の学生を夏季休暇中に派遣することにして、公立大学協会の会員校に参加を呼びかけました。



このプログラムに参加した学生だけでなく、様々なルートを使って支援活動を行った学生達の希望で、その時の体験を話し合う交流会が開催されることになりました。「車座シンポジウム」と名付けられた学生によるシンポジウムが2011年10月に東京で行われ、災害の支援活動では“モノの復興”だけではなく、被災した方とボランティアの“ヒトのつながり”が大切であることなどが話し合われました。



公立大学協会では、このような復興支援活動が大学における教育研究にも、また、これからの日本の文化形成にも大きな影響を与えると考えて、2011年11月に公立大学学長会議特別シンポジウム「震災復興とこれからの大学教育」を開催し、学生にも参加してもらいました。



被災地支援は、長期にわたって行われておりましたので、学生達は自分達の支援活動についてさらに話し合う機会を希望し、翌年2012年11月に静岡県立大学で行われた公立大学学長会議の際に、「被災地支援と地域防災活動」に関するワークショップを開催し、ワークショップで話し合われた内容を学長会議で報告することになりました。そこで、全国から集まっている学長と学生が直接意見交換する、“共同セッション”が初めて開催されました。これは、参加した学生や学長だけでなく、会議に参加していた文部科学省の方にも大きなインパクトを与えました。この時の経験が学生達や学長達を動かし、学生の自主的な組織づくりへと発展したのです。



2.2 学生ネットワークの発足

こうして組織された学生のネットワークは、“LINKtopos”と命名され、SNS(特にFacebook)などを使って活動が開始されました。LINKtoposという言葉は、公立大学学生ネットワークと、この全国大会の愛称になっているのですが、ご存知のように、topos(トポス)は「場」を意味するギリシャ語で、この派生語としてユートピア、ピオトープなどが知られています。古代のギリシャではトポスを、哲学などを議論する場としていましたので、学生達は公立大学の学生がLINK(つながり)の力を発揮できる場で、深い議論ができると考え、「英知を結集する場」を作り、「絆を生み出す発火点」になろうという願いをこめて命名されました。

LINKという英語と、Toposというギリシャ語から作られたこの造語を、LINKtoposという表記のOne Wordにして、“リンクトポス”を公立大学の合言葉にしようと願っています。

また、この活動を表すロゴも作られました。実は、全国の公立大学は北から南まで6つの地区に分けられ、それぞれを表すカラーも決まっています。マークの6つの花びらのような形と色はこの6地区を表しており、学生達がLINKすることで発火した火が炎として広がり、花火のように美しい大輪の花を造ることをイメージしています。



2.3 LINKtopos（学生大会）の開催

学生ネットワークは、自らが自主的・主体的になって、このような“全国大会”を継続開催することにして、第1回目の大会は、2013年10月に岩手県立大学で開催されました。この時のテーマには、「大学／学生と地域コミュニティの協働をデザインする」が選ばれました。これは、それまでの経緯を踏まえて、地域との連携に学生の力をどのように発揮できるかを考えるものとしたのです。大会には、34大学81名の学生が参加し、学長との意見交換も活発に行われました。



2014年10月には第2回目の大会が兵庫県立大学の本館及び、人と防災未来センターで開催されました。この大会では、「大学・地域における学生・教員・職員の理想的な協働を考える」をテーマにしました。シンポジウム形式の学び、ワークショップ形式による地域や大学の未来についての議論。さらに、学長との交流会（懇親会）も行われました。この年は学生だけでなく職員にも参加も呼びかけ、「学生・教員・職員の協働」を話題にすることが出来ました。33大学から104名の参加者が集まりました。



2015年10月には、第3回目の大会が名古屋市立大学および愛知県青年の家で開催されました。この年のテーマは、「地域を考える学生・教員・職員の理想的な協働体系と地域課題の解決に向けた取り組み」で、前年度に始まったテーマを発展させるものとなりました。ワークショップ型のグループ・ディスカッションは例年通り行われ、学長との交流はランチミーティングという形で行われました。また、議論の対象を絞るために、参加者に「地域コミュニティ」と「防災活動」の2つのテーマのどちらかを事前に選んでもらい、より深く具体的なアイデアを話し合うことができました。この年の参加者は、27大学93名でした。



2016年10月は第4回目となり、会場は北九州市立大学と、大学が市中に設置している“北九州まなびとESDステーション”、北九州市立玄海青年の家を会場として行われました。テーマは「地域につながる、未来につなげる公立大学」として、ワークショップでは、はじめて課題設定から考えるものに挑戦しました。とても難しい試みでしたが、参加者の満足度はとても高いものになりました。また学長との合同セッションでは、学生代表のプレゼンテーションと、学生を交えたパネルディスカッションも行われ、文部科学省からは大臣政務官が参加されました。この年の参加者は、これまでの最高となり38大学、119名の参加でした。



この時の様子は、大会の学生代表であった小笠原果美さんの紹介文という形で、日経のCollege Caféに掲載されており、
<http://college.nikkei.co.jp/article/91783517.html>
<http://college.nikkei.co.jp/article/91794617.html>
これらの記事は、巻末の「参考資料3」に掲載しています。

3. LINKtopos のプログラム

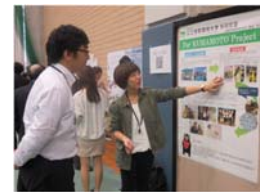
全国から 100 名近くの学生が参加する、多様性の高い集まりになりますので、いろいろな工夫をしながら、“つながり”と“気づき”を体験し、深めるために、下記に示すようなプログラムが行われてきました。

3.1 アイスブレイク

これは、初めて集まった人の出会いを演出し、参加した人の緊張感を解いて、親しくするために使われているものです。一種のゲームのようなものを行うのですが、さまざまな手法が考えられています。例えば、参加者の名前を呼び合っただけで並んだり、ニックネームを考えて名札を作って呼び合ったり、誕生日ごとにグループを作ったりします。これによって、グループの結束を高め合い、話し合える雰囲気を作りができます。どんなに人数が多くても、集会のスタートとしてはとても役に立つプログラムです。実は、初めて出会った人は、口も心も緊張感で硬くなっているため、これをアイス状態と考えて、これを砕く（ブレイク）ことを考える訳です。心をほぐして、コミュニケーションできるようにするプログラムです。

3.2 大学紹介ポスターセッション

参加する学生は、大学内では何らかのボランティアサークルや地域支援グループなどに所属している場合が多いので、自分達の活動を、お互いに紹介し合うためのポスターセッションが行われています。発表する人と、ポスターを見て回る、両方の役割がありますが、これを通して、参考になる活動を発見したり、共通の話題を見つけたりできます。ポスターセッションの良さは、たくさん話題を同時に、しかも短時間に、聞いたり議論したりできることや、興味のあるポスターの前では深い議論も行えるところにあります。このポスターは後述する学長との交流にも使われています。



3.3 シンポジウム形式とワークショップ形式による学びと議論

“大会”のテーマに関する学びを行うために実施するシンポジウム形式（講義形式）の集まりは、問題意識や疑問点を整理することに大きな役割を持っています。そして、宿泊を伴うこのような大会の、最大のメリットは、少人数のグループに分けて時間をかけた議論を行う、ワークショップ形式のものにあります。この企画・運営が大会の成果の鍵を握っていると思います。



参加した学生のアンケート結果からも、ワークショップにおける議論が最も大きく個人に影響していることが分かります。そこでは、出された課題にグループごとに取り組み、分析し、それぞれの思いを出し合っ、解決策を作るためのアイデアなどを考えることになるのですが、その過程で得られる、“気づき”や“自分との出会い”が、ワークショップの醍醐味になります。議論の行き詰まりから飛躍できた時の“喜び”は、参加者にとって忘れられない体験になることが、アンケートに書かれています。



ワークショップは、LINKtopos にとって非常に重要な部分を占めています。その企画・運営が非常に重要です。そのため、このレポートには、その手法や、企画・運営に関する考え方や注意点をまとめた「参考資料 1」として添付しています。

3.4 学長会議との合同セッション、交流会

この学生大会は、震災復興関連の問題を学長とディスカッションする場から始まった経緯もあり、学長会議のプログラムに学生がプレゼンテーションを行う時間を入れたり、パネルディスカッションのパネラーの中に学生が参加したりしてきました。また、懇親会（情報交換会）にも参加したり、ランチを共にしながらポスターセッションを行うことも試みてきました。

学生と学長が直接話し合うことは、各大学内でもさほど多くの機会があるとは思われませんが、全国から集まった公立大学の学長と学生が一堂に集まって交流できることは、学生にとっても、学長にとっても大きなインパクトとなりました。



4. LINKtopos（学生大会）の広がり

この大会に集まる学生は、震災復興でボランティアを経験した人が多く、各大学の中でも、何らかのボランティア活動をしている人や、関連のサークルから参加していましたが、徐々にその範囲が広がり、最近では、地域連携関連の学内活動をしている人、地域防災に取り組む人、地域連携関連のカリキュラムを履修している人、大学の広報・入試・FDなどの大学運営に参加している人まで参加しています。何らかのサークルに所属していたり、個人で興味を持って参加する方もおり、様々な形態となっています。

そのような中、それぞれの大学で LINKtopos 関連のサークル活動やイベントも行われるようになり、“学内 LINKtopos” と呼ぶ集まりも行われています。さらにその活動を地域に広げ、近隣の公立大学のネットワークを強めることも試みられています。

何らかの会合を大学内で開催して、学内の学生だけでなく、地域住民や、学内の教員、職員のつながりを作り出すことは、このネットワークの基本となることです。この数年の間に大阪府立大学、岩手県立大学、高知県立大学、名古屋市立大学、高崎経済大学などで開催され、さらに広がっています。



災害は何時どこで起きるかわかりません。学生達のこのようなネットワークが強まっていれば、適切な支援が迅速に行えると考えたのは、LINKtopos に参加した学生達でした。これは、LINKtopos の大切な理念で、そこから広がっていきました。

公立大学協会では全国を6つの地区に分けて、地区ごとの学長会議を行っておりますが、その地域ブロックに応じた大会を組織しようとの願いが、2016年度に開催された北九州における大会で話題に取り上げられ、後述する公立大学協会としてのサポート体制も、全国に広げること考えています。

5. LINKtopos の成果とこれからの期待

ワークショップの成果として提案されたことが、大学の具体的なカリキュラムとして取り上げられたものがあります。岩手県立大学では、従来から、岩手県内の市町村でフィールドワークを行う「地域創造学習プログラム」という課外活動が行われてきました。これはフィールドワークを通して学生（1、2年生）が岩手という地域を知り、その地域に根付くこと、そして主体的かつ能動的な学びを促すものでした。

このプログラム企画に、LINKtopos に参加した学生が参画することになり、学生達の提案や意見を積極的に取り入れて、それまでフィールドワークが2コースだったものを8コースまで広げ、その後正式な受講科目として大学の教育カリキュラムに組み込まれることとなりました。これは、具体化したひとつの例ですが、



LINKtopos で話題にされたことは、その場限りで終わらずに、学内や地域活動で具体化したものが多数報告されています。また、提案されたものをこれからの課題として、その実現を模索しているものに、公立大学内での“国内留学”制度があります。これを実現するためには、いくつかの問題がありますが、大学が地域貢献型の授業に関する相互協定など結んで、交流プログラムを考えれば、学生だけでなく大学間の交流を促す方策のひとつと出来ると期待されています。

LINKtopos は、開始された当初から、その企画者や公立大学協会としての目標が高く掲げられ、それを実現する形で、ここまで来た訳ではありませんでした。発展の可能性については話し合われてきましたが、どのような方向に向かうのが良いのかは、“走りながら”考えてきたのです。この形は、これからも継承していくことが大切だと思います。この企画に参加することを表明している学生達が議論していることや、新しいものを作りだす期待を込めて、いくつかの課題などをあげてみますと、

- ・ LINKtopos を公立大学の 6 つの地区で開催するなどの地区活動を広げる
- ・ その活動を支える、各大学における LINKtopos を組織化して発展させる
- ・ 各大学での活動を牽引するために、基盤になるグループを組織する
- ・ 大学を超えて“つながる”学生の学びのあり方を具体化する（国内留学）
- ・ 公立大学の使命のひとつである地域貢献における学生の参加を広げ、深める
- ・ 学生が、大学の構成員（教員・職員・学生）であることを意味づけする
- ・ 大学運営に関わる学生の姿を追求し、その意味を深める
- ・ “つながり”で発揮する力などに関する問題を学術的に研究する
- ・

LINKtopos は、何かの成果物を目標にしたプロジェクトではありませんので、ある種の“運動”に近いかもしれません。それを社会的・歴史的に意味あるものとするためには、“イベント”を超えた活動にすることが求められています。それによって、これまでは無かった新しい形を作っていけると思います。その形は、今はまだ明確ではありません。それは、これからこの活動を継続して行く学生達と、大学教員・職員との協働作業の中で追及していくものだと思います。ここで大切な事は、高い多様性を守って、企画・参加する人の“思い入れ”を強くしない議論だと思います。

5. 公立大学協会の支援

学生の自主的な活動として始まった LINKtopos ですが、公立大学協会では当初から、これを応援するために、特別なワーキンググループを作ってその活動を支援してきました。その後、この活動を公立大学のひとつの特徴ある働きにすることを期待して、ワーキングを常設委員会の下において、積極的に支援するようになりました。学長会議との同時開催、学長と学生の合同セッション、学長との交流会などのプログラムについては、様々な形が考えられますので、これからの課題のひとつにして検討していくことになると思います。

また、参加する学生の旅費は、各大学が一部負担していただくようお願いして実現してきたのですが、学内での手続きには工夫が必要のようです。この大会を、今後も継続して発展的に実施するために、LINKtopos を公立大学協会の事業のひとつと考えることで、学生に対する具体的な支援を、引き続けてお願いしたいと思っています。

さらに、公立大学協会では、委員会活動の中で、このような学生の働きを議論して学生から提案のあった国内留学制度を検討したり、地域政策系の学部を持つ大学の部会をあらたに作って、この分野に関する各大学の情報交換を進め、地域貢献やこのような試みの学問的なアプローチについて話し合うことも考えています。この働きを公立大学としてさらに成長・発展させるためには、学生達の自主的な働きを尊重しながらも、この活動を大学本来の教育システムの中で考えたり、研究対象にすることによって、その有効性や可能性を追求することができるものと期待しています。

6. おわりに

ここでは、LINKtopos の誕生から、これまで行われてきたプログラムなどを概括して、これを継続するための企画・運営に参考となることを願ってまとめました。

LINKtopos が持っているポテンシャルは、誕生の理念に結びついています。3つの言葉で表現できると思います。それは、“つながり”、“気づき”、“交流”です。

(1) つながり

このネットワークを作るきっかけになったのは、もともと多様性に富む公立大学が連携することを通して、学生達の出会いの機会を作り、“つながり”を強くしようということでした。

従来から“つながり”には“力”があると言われてきましたが、その秘密はどこにあるのかを。これからも考えながら、実践してほしいと願っています。

巻末の「参考資料2」には、“つながりの科学”として、これまでの研究成果をまとめました。

(2) 気づき

LINKtopos が発揮する大きな力は、ワークショップにあると思いますが、その中で大切なのは、“気づき”です。自己に対する気づきが主なものですが、様々な形があります。少し大胆な言い方をすれば、「自分が何者なのか」とか、「自分はちっぽけだった」・・・などの表現になりますが、そのような体験は、学生にとって、とても大きなことです。

これまでに、このLINKtoposに参加した方の“気づき体験”をまとめることができれば、その様子を詳しく知ることができると思っています。先輩たちの協力を求めて、出来ることを願っています。

このワークショップの実際については、巻末の「参考資料1」にまとめました。

(3) 交流

上記二つのキーワードが重要な理念ですが、仲間との出会いから、大学や学びの学問領域を超えて体験する“交流”は、参加する学生の世界を広くし、さらに学生同士から学長に広がり、しかも自分の大学の学長だけでなく、他大学の学長との交流まで広がることは、学生の大学生活を変えるものとなります。

このような働きによって、公立大学としての特徴を鮮明にすることができれば、ブランディングにつながると思います。

また、LINKtoposの当初の課題であった、いつどこで起こるか予測できない自然災害などに対処する支援のためのネットワークを備えることが出来ると思います。

最後に、このレポートは、第1回目の大会から4回目まですべて参加してLINKtoposをリードしてきた学生の一人、大阪府立大学・片山直也 (n1227katayama@gmail.com) と、同じように初回からこの大会を支援してきた、公立大学協会専務理事・奥野武俊 (takiokuno@gmail.com) が、LINKtoposをこれからも継続発展させていくための企画・運営に参加してくれる学生リーダーに伝える必要性を感じて話し合っただけです。

なお、また、LINKtoposを紹介するスライドショー (PPT) を、
http://www.kodaikyo.org/?page_id=7568 に置いてあります。
参照していただければ幸いです。

参考資料 1

ワークショップの実際とその力

LINKtoposに参加したほとんどの学生は、自分の生き方を変えるような大きな変化を体験したことを口にします。それは、新しい仲間との“出会い”や“つながり”の他に、プログラムの中で行われるワークショップで経験することが大きいと考えられます。これは、講義形式で、聞くことに集中する学びでは無く、少人数で行う議論の中で、それぞれの考えやアイデアを語り、みんなが安心してのびのびと深め合っていく中で生まれる、特別なものだからです。

ワークショップは、議論を通じて新しいことを発見したり、新しい何かを作り出す創造の場とするもので、“多様な人たちが主体的に参加することによって、そのチーム内で参加する人の相互作用が高められ、創造と学習を生み出す場”となります。ただ、多くのテキストに書かれてある、ワークショップの理想的な力は、とても素晴らしいものですが、実際にワークショップを企画・運営して、その理想像を実現するのは、さほど簡単なことではありません。特に、リード（ファシリテート）する人の思い入れや希望、情熱が先走ると、空回りしてしまうことにもなり得ます。この資料は、ワークショップを企画し、運営する人のために、注意すべきことなどをまとめたものですが、そこからLINKtoposが発揮してきた力を感じ取っていただければ幸いです。

2. ワークショップとは？

ワークショップのもともとの意味は、「工房」、「仕事場」、「作業場」です。ここから、“主体的に参加したメンバーが共同作業を通じて創造と学習を生み出す場”を意味するようになりました。以下に、いくつかの特徴を上げてみます。



2.1 鍵は参加者が持っている

自発的に参加したメンバーは、当事者意識を持ちながら、一緒になってワークショップを作り上げていきます。その点に関する理解が非常に大切です。その場には後述するような最低限のルールだけがあり、各人が知恵や個性をぶつけ合いながら、その場、その時だけに生まれるものを共有します。いわば、皆で、音楽を即興で作るようなものです。その過程を通じて、メンバーも学習し成長していくことが出来ます。その場の進み方を舵取りする指揮者（ファシリテーターと呼ばれます）は必要ですが、主役はあくまでも参加者で、それぞれが主役です。参加者同士が互いに持てるものを出しあって、大きな相互作用を作るのです。ファシリテーターは、何かの指示を与える人ではなく、その場に寄り添いながら、より大きな成果や学習が生まれるように、促進・支援していく係りです。

ワークショップで最も大切なのは、“その時、その場で起こったこと”と、よく言われます。“新たに生まれるもの”、言い換えると創発性がワークショップの命です。参加者はそれぞれ、自分なりの経験、考えや思いなどを持って集まります。それらを素材として、料理を作ると考えてもいいかもしれません。



ワークショップという大きな鍋にその素材を入れて、グツグツと煮込んで行くことに似ています。素材同士がぶつかり合ったり、溶け合って、新しい味が生まれますが、それは鍋の中で行われる化学反応のようなものと考えることが出来るように思います。

したがって、新しい料理に仕上げられるかどうかは、みんなの知恵にかかっているとも言えます。現実には、うまくいかずにモヤモヤで終わるときもあれば、すっきりといい味

に仕上がるときもあります。正直に言って、どのような味になるか、やってみなければ分かりません。むしろ分かっていない（正解が無い）からないからこそ、参加する人の期待感を醸成するのです。

また、ワークショップは、参加する人が自らの素材を提供し、協力して料理しようという気持ちにならなければ成り立ちません。しかも素材の味、すなわちメンバーの知恵とやる気が十分に出てこないと、いい料理ができません。メンバーの主体性がワークショップの決め手となります。さらにもうひとつの大切なことは、“相互作用”です。ワークショップには、それぞれに持ち味や個性がある多様な素材が集まります。それをぶつけ合わせながら、化学反応を起こし、チームとしての新しい味をつくり出す訳です。いかにして、味の調和を図りシナジー効果を発揮させられるかが、ワークショップの妙だと言っても良いでしょう。

2.2 ワークショップの5つの特徴

- (1)参加： 多様なメンバーの主体的な参加無くしては、ワークショップは成り立ちません。参加する、しないを決めるのも、どれくらい熱心に活動するかを決めるのも、参加者が自分で決めます。常に当事者意識を持ちながら、参加者と一緒になって作り上げていきます。
- (2)体験： 参加したメンバーが、それぞれの体験を持ち寄り、それを基に活動を組み立てるのがワークショップです。また、ワークショップを通じて、参加者が共通の体験をすることで、日常では得られない創造と学習を生み出します。
- (3)協働： お互いの資源を持ち寄り、対話という名の協働作業を通じて、活発な相互作用（相乗効果）を起こすことで、ワークショップのダイナミズムが生まれます。協働はワークショップの中核をなすものと思って良いでしょう。
- (4)創造： 一人では思いつかないことを発見したり、主体的な参加者がいるからこそ、できる成果を作り上げる。そんな予想もしていない新しい何かを生み出すことが、ワークショップの醍醐味になります。
- (5)学習： 参加者同士の活発な相互座用を通じて、一人では得られない気づきを獲得すると同時に、全員で大きな学びを培っていきます。創造を目的としたワークショップであっても、それをつくり上げるプロセスを通じて、参加者の学習を引き起こして行きます。ワークショップは、個人やチームを成長させるのに欠かせない手法です。

2.3 LINKtopos 流ワークショップのルール

ワークショップには必要最小限の簡単なルールしか作りませんが、LINKtopos では、以下のようなルールを採用してきました。

- (1) 上下関係を考えない
- (2) お互いの発言をちゃんと聴き合う
- (3) 粘り強く、思い込みの枠を破る
- (4) 思い切って発言する
- (5) 相手の意見に対して否定は厳禁
- (6) 熱く、楽しく、真剣に



3. ワークショップを企画する

企画で最初に考えなければいけないのは、ワークショップのコンセプトを定めることです。コンセプトとは、一言でいえば、「誰を対象として、何を目的とするか」ですが、これを、できるだけ明確に言葉で表現したものです。これが、ワークショップの土台になります。次のような点を考えて、スタートします。でも、必ずしも明確に決まってからプログラムに移行できるとは限りません。具体策を相談する中で、何度もここに戻って、考え直し、何をしたいのか明確にして行ければいいのです。

- ・何のためにこのワークショップをするか
- ・何を実現したいのか、何を生み出したいのか
- ・どんなことが起こってほしいのか
- ・何をみんなに伝えたいのか
- ・何を持って帰ってもらいたいのか



ワークショップのプログラムは、一般に、オープニング、メイン、クロージングの3つの部分で構成します。まず、オープニングでは、ワークショップの狙い・ゴール・進め方・ルールなどを共有し、ウォーミングアップやマインドセットします。ここの良し悪しで、参加者が乗り気になるかどうか決まります。単なる挨拶や、ワークショップの説明の時ではなく、参加者に熱意や、考え方を伝えることが大切です。また、本体となるメインの会合は、ワークショップの中心をなす部分で、この資料はこの部分を説明することに大半のスペースを使っています。クロージングは、成果を確認したり、活動を振り返ったりする締めの部分で、次につなげる役目を持ちます。参加した人が、チームや自分に何が起こったかを考える時にします。

3.1 ワークショップの基本型

ワークショップには、状況やゴールに応じて使い分ける、いくつかの基本形があります。それを上げておきます。多くの場合は、進行状況に応じて、それらを使い分ける適切な判断が必要になります。

A. 起承転結型

ワークショップの最も基本となる形で、応用範囲が広いものです。短い場合は2～3時間、長ければ数日かけたワークショップでこのサイクルを回すことができます。

- (1) 起：関係性を高める（チームビルディング）
- (2) 承：資源を引き出す（インプット）
- (3) 転：相互作用を高める
- (4) 結：成果を分かち合う

B. 発散収束型

これもワークショップの基本形です。あるワークショップをこの形で企画する事にも使いますが、話し合いの進行過程でいくつかのステップを踏む時、それぞれのステップでこのサイクルを回すこともできます。

- (1) 枠組みを共有する：活動の枠組みや必要な情報を分かち合う
- (2) 考えを発散させる：自由に意見を出し合う。不完全燃焼を恐れない。
- (3) 考えを収束させる：発散の時間とメリハリをつける
- (4) 成果を共有する：共有や法則として一般化する

C. 問題解決型

何かの組織体で問題を整理して解決策を探る時や、自治体などの社会運動などで用いられるワークショップで多用されています。LINKtoposでも、この形がよく使われてきました。この手法は、なんらかの成果を求める時に効果があります。小さな問題を課題にすると1日程度、組織全体や地域社会が抱える大きなテーマなら数日かけて話し合うことが出来ます。

システムズ・アプローチの中では、この手法は、SWOT（課題を、強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）の4つのカテゴリーで要因分析する）と呼ばれるギャップアプローチに分類されています。

- (1) 問題を共有する：現状とあるべき姿のギャップを明確にする
- (2) 原因を探索する：「なぜ？」を繰り返しながら原因を探索する
- (3) 解決策を立案する：固定概念を破り、柔軟な思考で考える
- (4) 意思を決定する：全員一致できる最良な案を選ぶ

D. 目標探索型

この手法は、組織体や社会系のワークショップで使われています。これは、前述した問題解決型のいわゆるギャップアプローチではなく、理想に向かって何ができるか考えるもので、ポジティブアプローチと呼ばれます。この時の成果物の質は、メンバーの関係性で決まります。

- (1) 資源を発見する：持っている強み、長所、潜在力、成功体験などを共有する。
- (2) 理想を掲げる：上記の資源を元に、夢や情熱を共有し合いながら、考えられる自分たちの使命や究極の姿を見出していく
- (3) 目標を打ち立てる：その認識が一致すれば、具体的なイメージや目標に落とし込んでいく。実現性や現実とのギャップを考えず、具体的にデザインしていく
- (4) 方策を考える：どんな方法とプロセスで、目標を達成していくのか、過去のことや現実の姿にとらわれず、大胆なアイデアを考える。

この手法は、さほど一般的ではありませんが、大きな期待が寄せられているものです。

その他

- ・過去未来型
- ・体験学習型
- ・発想企画型
- ・環境適合型
- ・組織変革型



などと呼ばれているもありますが、これらを適当にミックスすることが大切です。

3.2 具体的なプログラム

つぎに、具体的なプログラムを説明してみます。

A. 場を温める

話し合いのスタートで、一人ずつ、最近あった出来事、気になるニュース、今の気持ちなどを自己紹介も兼ねて話していくことや、あるいは、「グループの名前を決めよう！」という課題に取り組むなどの共同作業を行ってもらいます。このようなスタートの課題は、“場を温める”ために行います。

B. 考えを広げる

ブレインストーミング（ブレスト）で様々なアイデアを出すことをよく行います。メンバー全員で可能な限り、多くの意見を出し合うために、制限時間内にいくつかのアイデアを出せるか競って、アイデアの幅を広げることができます。思いついたことをすぐに付箋に書くことにして、次の4つの原則で行います。

1. 自由奔放・制限なく、どんなアイデアでも OK！
2. 批判厳禁：人のアイデアを批判したり、評価しない
3. 便乗歓迎：人のアイデアにアイデア付け足して、発想を広げる
4. 質より量：質の高いアイデアを生むためには、量が必要

C. マインドマップの作り方

アイデアを自由に発想するときは、例えば、ホワイトボードや模造紙の中心にテーマを書いて縁で囲み、思いつくキーワードやアイデアをあげて、それをツリー状（放射状）に書いていきます。ひとつの枝には、ひとつのキーワードだけを書き、幹と枝を意識しながら書き分けると、広がりやアイデアの関係性が分かります。

D. 考えを深め合う

お互いの考えを出し合うために、ワールドカフェと呼ばれる手法もよく使われます。これは、大人数の参加者を小さなグループ（10名程度が標準）に分けてテーブルを囲ませ、これを島とします。そして、テーブルごとに話し合いのホストを一人決め、残りは旅人になります。司会の合図で、ホストは自分の島に残り、旅人は他の島に行き

ます。集まれば、ホストが情報を発信して、数回これを繰り返し、情報を集め、共有する方法です。

E. オープンスペース

話し合いをまとめる手法にも、いくつかの手法があります。

(1)和図法

ブレストなどを出し合った意見の中で、似たようなものを近くに並べグルーピングをします。小中大のグループに階層ごとにまとめ、いくつかのグループに整理できれば、それぞれのグループの関係性を可視化できます。ここでは、KJ法と言われる有名な方法がよく使われます。

(2)マトリクス法／表

出されたアイデアを、簡単にできる、できない、効果が大きい、小さいなどの軸で整理すると、目標に対する最も効果的な案を選んでいくことができます。考える軸を考えると、マトリクスが出来ます。

F. 成果物を共有する

まとめられたものを、他のグループと共有する（発表する）時に、グループでまとめたものを説明するためのPPTを作る方法と、ポスターとしてまとめるやり方があります。



G. 振り返り

何らかの成果を出した後で、今感じていることや心境を語ってもらい、“振り返り”（単なる反省ではありません！）が行われます。例えば、体験した事を時系列で、気づきを深めていくことがよく行われます。みんなが参加して、話し合うことが大切です、そして、参加者が次の行動につなげていくためにどうすればいいかを考え、それを具現化することも有効です。その時に、振り返りシートと呼ばれる話し合いのポイントを書いたものを活用するとよいでしょう。また、次の行動を、「私の宣言文」として表明することも、興味深い結果を生みます。

4. 評価

得られた成果について評価し、審査してグループごとに競争させることは、かなり有効ですが、審査基準を明確にしておくことが必要です。審査会を設ける場合は、ワークショップのプロセスを見守ってもらい、かつ中立な立場で審査をすることが必要です。また、参加者全員による投票で評価することも、よく使われます。審査基準を明確にして投票してもらうことで、全体の雰囲気作りもできます。

5. ファシリテーター

前述しましたが、ワークショップには、ファシリテーターが必要です。その役目は、まず、“場を保つ”ことにあります。ワークショップが始まれば、参加者を信じて進み具合は委ねるのが基本的なことです。ただ、放置するのではなく、“場”をしっかりと見守ることを心がけることが何より大切です。また、「どうしようもないときは、助けてくれる」という安心感を参加者に与えられることも重要です。脱線、少数意見の無視などが起これば、助け舟を出さないといけないこともありますし、場合によってはプログラム案を変更することも必要になってくるので、観察することと、判断が重要です。何が大切なのか、いま何をしなければならぬかを常に考えます。そのためにはワークショップの理念をしっかりと把握していることが、何よりも大切です。

参考文献（本資料は、主に、以下の文献を参考にしてまとめました。）

1. 堀公俊, 加藤彰 (2008) 『ワークショップ・デザイン』
2. 森時彦 (2008) 『ファシリテーターの工具箱』

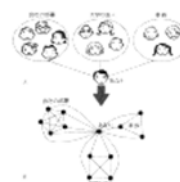
参考資料 2

つながりの科学について

ここでは、ネットワークに関するこれまでの研究で何が明らかになっているのかをまとめて、これをさらに拡大・深化・応用するために何が考えられるか、発展性、研究テーマとしての問題点にはどのようなことがあるのかを考える。

1. 様々なつながり

人はつながりを形成する。人は、そこから外れて生活することができない。このつながりを、最近のことばで言えば、“ネットワーク”。この言葉は、あたかもコンピュータ・ネットワークのインターネットのことを言っているかのように見えるが、人のつながりだけでなく世の中の様々な仕組みを“ネットワーク”と考えて、その中にある法則を考える。その視点から、さまざまな社会学的な研究が行われてきた。



ネットワーク

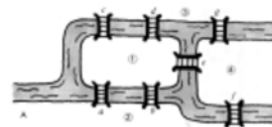
多くの組織は、ピラミッド型の階層構造を取るが、ネットワークと言われる組織構造は、原則としてフラット構造である。1960～70年ころ、日本の行動成長期の後半に安保闘争があった時代には、社会運動を横並びの自由な組織で行い、社会を変革しようという機運が強くなったことがある。しかしながら、この動きを研究テーマにして体系化することまでは進むことがなく、一過性のいわゆる“ムーブメント”のひとつで終わったと言われている。ただ、フラット組織そのものは、企業や行政組織の中でも重視される傾向にある。

さて、人と人のつながりの基本は2者関係であるが、3人のグループ、5人グループなども基本になりそうで、ネットワーク的な発想は2者関係にこだわらない。人のつながり以外のものでは、もちろんインターネットの世界が有名であるが、国の同盟・経済協力・国際関係、大学の連携、航空路、鉄道、道路・・・さらに脳細胞の活動、たんぱく質の分子などマクロからミクロの世界にも及んでいる。動植物の世界を“食うか食われる”という関係で表した食物連鎖や、物質循環で考える生態系もネットワークと考えられる。生態系のことをEcosystemと呼ぶが、このシステムと産業支援のシステムのアナロジーを考えて、最近の企業支援のありかたはエコシステムと呼ばれている。

ネットワークをシステムズ・アプローチ理論から考えることには新たな可能性があるように思われる。システムの基本には“階層構造”という機能的なものがあるが、ネットワークに内在する仕組みとの関係が明らかになれば面白い。さらに、最近の情報学では、どのようにしてネットワークが生まれ、変化していくかを、創発モデルなどを使ってシミュレーションしたり、SNSにはどのような発展がありえるかなどの研究が行われている。このアプローチも興味深い。

2. これまでの研究と“スモールワールド”

数理的なネットワークの研究は、18世紀のグラフ理論によるものに遡ることができる。有名な数学者オイラーは、ケーニヒスベルクを訪問した時、川にかかっている7つの橋を1回ずつ通る最短の散歩道があるかという問題を思いつき、数理的に検討した結果、「そのような道は存在しない」と結論付けた。それが数学におけるグラフ理論の始まりである。彼が考えた橋の様子を右図に示す



ケーニヒスベルクの橋

1998～99年には、現実のネットワークに関する研究が行われるようになり、そこでは「複雑ネットワーク」という言葉が使われ、その結論は、「スモールワールド」と「スケールフリー」といわれるようになった。

スモールワールドを示す有名な実験に次のようなものがある。

1. 1967年、アメリカの心理学者 Stanley Milam は、知り合いに手紙を出す手法でターゲットとなる人に至るまで、何人を経由するか調べた。彼はネブラスカ州オマハの住人 160 人を無作為に選び、「同封した写真の人物はボストン在住の株式仲買人です。この顔と名前の人物をご存知でしたらその人の元へこの手紙をお送り下さい。この人を知らない場合は貴方の住所氏名を書き加えた上で、貴方の友人の中で知っていそうな人にこの手紙を送って下さい」という文面の手紙をそれぞれに送った。その結果 42 通 (26.25%) が実際に届き、42 通が届くまでに経た人数の平均は 5.83 人であった。この実験は 6 次の隔たりの実証実験として知られている。実験には多くの問題点があったことが指摘されているが、この分野における有名な実験となっている
2. 1998 年に、Duncan J. Watts と Steven Strogatz は 2002 年にインターネットを使った、大掛かりな社会実験が行った。日本でもこれに類するイベント (ゲーム) が行われたことがある。例えば、2005 年 5 月 29 日のテレビ東京の実験、2004 年 7 月 6 日に行われたフジテレビの実験などが知られている。

これらの実験の結論は、“6 次の隔たり” (Six Degrees of Separation) と言われ、世界中の人々は間接的に 6 人程度でつながることが出来るというものである。これをスモールワールドと言う。人間のつながりについて、“世間は狭い” とよく言われるが、これを表している。最近急速に発展した SNS に代表されるいくつかのネットワークはこの説を下地として作られたと言われており、次はどのようなようになるか (すべきか) を、このような理論から考えている研究者もいる。

この隔たりを意識してうまく使うと、現実的ネットワーク形成における教訓が得られる。

- ・情報は、自分と異質な人とのつながりで効果的にできる
- ・したがって、周りを身内で固めすぎないことが大切
- ・交渉やビジネスチャンスをつかむためには、結びつきの間隙を狙うのがいい
- ・情報は近道を作って、それを通じて多人数に発信するのが効果的

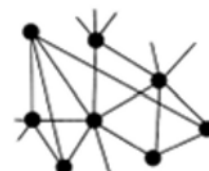
などである。

3. クラスタによるつながり形成

上記の“6 次のつながり (隔たり)” が我々の社会現象をすべて説明している訳では無い。多くの“つながり”は、1 対 1 のペアーが基本にはなっているが、その仕組みで社会ができていくのではなく、ある塊のグループ (これはクラスタと呼ばれている「集団」) のことで、コミュニティと言ってもよいもの) をつなぐネットワークになっているからである。これを説明したのが、上記の Watts らのモデルであった。

ネットワークを使った現実問題を考える際には、クラスタの形成 (あるいはコミュニティの在り方) が非常に重要な課題になる。人間がクラスタをなぜ作るかについては、色々な説明があるが、人は知り合い同志でつながることで“安心”が得られると考えられている。

つながりを効果的に生かすためには、6 次のつながりを意識して、内輪だけで集まらないことが大切で、異質なつながりを大きくする際には“信頼の解き放ち” (山岸俊男: 信頼の構造、東京大学出版会、1998 年) が必要と言われている。そこにはいわば、自分のグループから“飛び出す”勇気が求められるが、人間には“安心感”も必要であり、この両輪が重要と考えられている。この、情報を生かすための 6 次の隔たりとクラスタ (安心を得る) の両立は、最近の“グローバル”と呼ばれる経営、地域創造、地域社会のデザインなどにおける考え方に重要なもので、クラスタのある場合を図示すると右図になる。



クラスタのあるネットワーク

4. “スケールフリー”のネットワーク

ネットワークのもう一つの特徴は、スケールフリーと言われる現象で、パレートの法則（80/20の法則）をネットワークで表現したものと言ってよい。ネットワークにおける様々な現象（例えば結びつきの分布）は、ある平均値まわりにバラつく、いわゆるガウス分布にはならず、偏りをもつ“べき乗分布”になって、裾の長い分布を表すことを、このように呼ぶ。

表現を変えると、人のネットワークは関係する人すべてについて均等なつながりで出来るわけではなく、その結びつきは偏ることを表している。多数のつながりを実現する人数は限られてそこに集中する。この中心になる節点をハブと呼ぶ。この現象は、人間関係だけでなく様々なネットワークで観察される。例えば航空路におけるハブ空港の発着便は非常に多くなるが、地方空港は便数も限られ、結ぶ地点も限られている。均等には結ばれない。このような、偏りのできるネットワーク現象をスケールフリーと呼ぶ。

さらに表現を変えると「富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなり、貧富の格差は広がりやすくなる」とも言われる原理と同じもので、特徴には、①成長するときに現れる、②つながりは強いものに集中するという二つのことが上げられている。たとえば、ネットワークを作る時には均等に結ばれるもので始めても、時間の経過とともに必ず偏りができる。優先的選択が行われるためと考えられているが、この点に関する研究は、スモールワールドに関する研究より遅れている。

スケールフリーのネットワーク形成においては、いかにハブ（節点）を配置するか、誰に（何に）その役割を任せるかなどが重要であるが、どのようにそれを形成していくかは、ネットワークを作る企画・作戦・戦略に関わることになる。さらに、ネットワークを結ぶ関係は、一般に線で表されるが、この線は完全に双方向関係を表しているよりは情報の流れを表すべきで、結びつきは方向性を持ったベクトルになっている。節点からどのようなベクトルが出ているかの状況把握が重要になる。つながりによって、どのような情報が、どの方向へ流れるかによって、そのネットワークが成長するか、進んだ関係を作っていくかを考えることができる。



スケールフリーのネットワーク

5. まとめ

ネットワークの形成に非常に大切な情報伝達を効果的にするために、“異質のものをつなぐ”ことで多様度（情報エントロピー）を高くすること、またこれに相反する“内輪だけで集まる”ことを適度に導入して、ネットワークの基本となるクラスター作りを行い、ネットワークを構成するメンバーの安心感を保つことが実現されている。

学生達の集まりの中で形成される“つながり”を発展的に捕えて、地域貢献における大学と地域のつながりなどを、学術的な視点で研究すれば、情報理論における数学的な取扱いや、歴史学、社会学的なアプローチによって、公立大学の機能が発揮できる方策を見出す可能性を期待したい。

参考文献（本資料は、以下の参考文献などを使ってまとめた）

増田直紀：私たちはどうつながっているのかーネットワークの科学を応用するー、中央公論社、2012

ニコラス・A・クリスタキス他：つながり-社会的ネットワークの驚くべき力-、講談社、2014

2017.03.13 [skill up-自己成長]

大学生がつながる力(上)

震災がきっかけで生まれた「リンクトポス」とは？

小笠原果美公立大学・学生ネットワーク代表、岩手県立大学社会福祉学部4年

2016年10月8日から3日間、全国公立大学・学生大会、LINK topos2016（リンクトポス2016）が北九州市立大学で開催されました。今回で4回目になったこの大会は全国の公立大学の学生・教職員が集まり、新しい仲間と出会ってつながりを広げることを目的としたものです。地域と大学のつながりを学ぶシンポジウム、地域の未来を考えるワークショップ、それぞれの大学の地域活動や防災活動などを紹介し合うポスターセッション、さらに学長先生たちとの交流会などのプログラムで構成されました。



“LINK topos”とは、公立大学・学生ネットワークおよび全国大会の愛称です。もともと topos は「場」を意味するギリシャ語で、古代ギリシャで人々が盛んに議論していたことに倣い、公立大学の学生が LINK（つながり）の力を発揮する“英知を結集する場”にしようとの願いが込められて命名されました。

きっかけは 3.11

なぜ私たちはつながりを大切にしているのでしょうか？ どうして SNS でつながることが当たり前の時代に、北は北海道から南は沖縄までの全国の公立大学生 120 人以上が 1 カ所に集まり、リアルなコミュニケーションを図るのでしょうか？

実は、LINK topos が生まれたのは 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災がきっかけでした。当時、被災した東北のために全国各地から大学生が集まってボランティア活動をしていましたが、それを知った公立大学の学長先生たちが「被災地支援活動に取り組む学生の生の声を聞いて学生支援のあり方を探り、その中で大学がすべき被災地支援を考えよう」と、各所で活動している学生達を公立大学学長会議に招集したのです。2012 年、今から 4 年前のことでした。

そこに集まった学生や学長は、支援活動のあり方を議論して、1つの確信を得ました。それは、たとえ一人でもできることに限界があっても、つながることで知識・経験・思い・価値観が共有され、学び合い、自分たちの活動の幅が広がるという事でした。“つながりには力がある”と……。

これをきっかけにして学生たちはネットワークを立ち上げ、公立大学協会を通じて全国の公立大学のサポートを受け、LINK topos を誕生させました。その翌年から年に 1 度、公

立大学の学長会議と同日程で全国の公立大学の学生たちが集まる LINK topos（全国公立大学・学生大会）が行われるようになり、今や学生にも大学にも、そして地域にもインパクトを与えるようになったのです。

組織的な活動ができなかった熊本地震

2016年で4回目になった LINK topos。熱い思いをもってこのネットワークを立ち上げた先輩たちはすでに卒業し、この大会が始まった時は高校生だった私が、今回の大会の代表に指名されました。こんな大きな大会を運営することを考えると不安が大きく、悩み、迷いましたが、原点に立ち返って全国の学生がつながり、活動内容や想いを共有することに重点を置けばいいと考えて引き受けることにしました。

この決断の裏には、2016年4月に発生した熊本地震の存在がありました。LINK topos が東日本大震災をきっかけに誕生したネットワークでありながら、熊本地震の際には、お互いの活動状況の共有などの情報交換はできたものの、組織的な支援活動はできませんでした。これは、熊本地震の際には被災した自治体のほとんどが県外のボランティアを受け入れていなかったことや、熊本を含めた九州地区の LINK topos によるネットワーク機能が不十分だったことが大きな原因でした。岩手で生まれ育った私は東日本大震災を経験していたので、やるせない気持ちと残念な心でいっぱいだったのです。LINK topos の原点である“つながることによる力”の重要性を考えて、次につなぐ責任があるように感じたのです。災害が起きてからでは遅く、平時からのつながりが大切なのだ…。

英知を結集するあの「場」を、ここで絶やしてはいけない

私が LINK topos に初めて参加したのは、2014年に行われた第2回目の大会でした。地域活動に心を砕く学生がこんなにいるのかと衝撃を受けたことを、今でも鮮明に覚えています。あの時は、ただ一人の参加者だった私が、全国の公立大学の学生大会の代表をすることになるとは夢にも思っていませんでした。身に余る大役だとは思いましたが、自信はありませんでした。ただ、自分の大学で地域活動を行う中で壁にぶつかった時、私の心の支えは LINK topos で出会った全国にいる仲間たちでしたから、英知を結集するあの「場」を、ここで絶やしてはいけないという想いが、大役を引き受ける決め手になりました。代表を引き受けてから1年間、多くの方のサポートを受けながら準備し、LINK topos2016を無事開催できました。大会の最終日に、全国から集まってくる学長先生との交流会で、自信に満ち溢れ、生き活きと自分の活動を話している仲間の姿を目の当たりにして、その堂々とした姿や目を見張るほど輝いた表情を見て、「ああ、ここまでやってきてよかった」と思いました。3日間のプログラムを通じて、学生たちが想いを磨く場をつくることができたと思ったのです。

今回は、私がこの代表を引き受けてから大会終了までのことを少し具体的に、お話します。

2017.03.17 [skill up-自己成長]

大学生がつながる力(下)

学生が地域や大学にできることはなんだろう？

小笠原果美公立大学・学生ネットワーク代表、岩手県立大学社会福祉学部4年

自信のなかった私が LINK topos の代表を引き受けて、最初に考えたことは、これまでこの大会を引っ張ってきた先輩たちのアドバイスを聞くことでした。すでに社会人として活躍されている忙しい方がほとんどでしたが、旅費は自前で、しかも仙台に集まってほしい.....という私の願いは、前年度の代表を務めていた先輩の努力で実現しました。まるで今回の大会がここから開始されるような集まりになりました。



「自分らしく、ありのままがいい」って何？

学生が地域や大学にできることはなんだろう？ 公立大学に必要なものは何か？ それをサポートする先輩にできることは何か？ “つながる”力はどこから来るのだろうか？など、私の心が躍るような深い議論になり、とても楽しい時間でした。でも、私の心は「今年はどうのようなテーマを選んで、どのようにプログラムを作ればいいのか...」という代表としての責任感でいっぱい、そのためのアドバイスやヒントを得たかったのです。結局、この“仙台会議”で先輩方がまとめた言葉は「これまでの成果や方法に捉われず、あなたらしいことができればいい」でした。

「自分らしく、ありのままがいい」と言われると、それは何だろう？ と考え込む日々が続きました。このような大会をリードするためには、LINK topos のあるべき姿や自分の願いを明確まわりに伝えて、それを実現する方策を考えるのが普通だと思うのですが、どう考えても、それは私の得意とすることではありませんでした。ただ、私の周りには今回の大会プログラムと一緒に考えてくれる何人かの運営メンバーがおり、また、学生大会をサポートする先生方のチームが公立大学協会の中に作られていました。みんな、私のモヤモヤした心を整理して、考えをまとめていく作業に根気よく付き合ってくれました。突然すばらしいアイデアが降ってくることはありませんでしたが、仲間や先輩、先生との話し合いの中で見つけていくことができました。

“つながる力を実感したい”

私の願いは、“つながる力を実感したい”ということでした。今から考えると、当たり前のことだと思うのですが、それを実現する方策は決まっている訳でなく、どこかに転がっているということもありません。大切なことは、自分の心を決めて前に進んでいく勇氣なのだと思います。私は仲間に恵まれていました。いつも、「果美ちゃんの願いは？」とか「どんな結果をイメージしている？」と聞いてくれました。私はどこかで心を決めればよかったのです。全国に広がっている仲間ですから、何度も集まって話し合うことはできません。それには SNS が役に立ちました。スカイプや LINE を使った会議は、とても大きな助けになりました。

また、最終学年であった私には、就職活動や卒論、国家試験などにも取り組んでいたもので、大会の事だけでなく「元気？ 就活はどう？」などとも言ってくれたことに、どんなに助けられたか分かりません。それが私の活動のエネルギーになったと思います。

課題設定型ワークショップに挑戦

2016年10月8日、いよいよ大会が始まりました。最も難しかったのは、ワークショップのテーマを「ワクワクする地域の未来を考える」という抽象的なものにしたことでした。これまでの大会では、運営メンバーが課題を設定して、それを解決することをテーマにしてきたのですが、今年はこれからの社会の担い手となる学生たちに必要なこととして、“課題設定型”のものに挑戦することにしたのです。これが達成できれば、これからの地域や大学だけでなく、参加者一人ひとりに大きな価値を生み出すはずと考えました。

(1)地域の未来を想定する (2)その中で課題を設定する (3)課題解決の企画を出すという流れなのですが、予想通り悪戦苦闘するグループが続出しました。短時間のワークショップでそこを乗り越えられるかどうかの分かれ目は、「自分たちが何者なのかを知る」ことに気づけるかどうかでした。いつまでも“アイデア”に固執していると、どうしてもそこから抜け出せませんが、自分が何を考えてきて、何を勉強してきたかを見つめ、そこで何ができるのか。これを話し合うことができるようになったチームは、この山を乗り越えることができました。あるチームは全国に点在している課題のある大学や地域を「渡り鳥」のようにつないでいくという企画を提案し、結果的に独創的なものになりました。

「自分の世界はちっぽけだったな〜」

“自分を見つめて、自己に気づくこと”は、この大会の大きな課題であり重要な成果ですから、これからも大切にしていこうことになると思います。今回、初めて参加したある方は、「自分がこれまで勉強したことのない専攻や分野に取り組んでいる学生たちとの話の中で新しい発見がありました。自分は社交的なタイプではないと思っていたのですが、そんな人たちとの出会いにワクワクして、積極的に話しかけている自分がいました。これまでの自分の世界はちっぽけだったな〜」と語ってくれました。全国の学生たちの輪をすこしでも広げるための助けになれたと感じました。また、多くの学長先生に「LINK topos」と呼んでいただいたことは、この取り組みが根付いてきたことを表していることを実感させてくれ、とても誇らしく思いました。

大学生同士のつながりは大変貴重な財産である反面、不安定で脆い側面もあります。学生は4年で大学から去っていかねばなりません。つながる努力を不断に行わなくては、あっという間に薄れていってしまうでしょう。LINK toposを通じて、人とのつながりが力を発揮することを多くの人気づき、濃く、強く、深くつながることを財産にして、この活動をさらに進めてほしい。全国に広がってほしい。心からそう願っています。



authored by 小笠原果美